

＝号外を喰う＝

本当に可哀想なのは？

新型コロナ禍の中、安全・安定輸送のために東京総合車両センターで車両メンテナンス業務に奮闘されている全ての方々に心より敬意を表します。

さて、「新鉄労組ニュース-号外-」が7月6日付で発行されました。翌週には正門前で配布していましたのでお手にされた方々もいると思います。その内容は「これで良いのでしょうか！『将来のあるべき姿』を考えましょう」という見出しで委員長の問題提起が掲載されています。そしてその中で私たち J T S U - E について批判されています。

まず私たちについて「他労組のことですのでコメントする立場にありませんが」と言っていますが、それなら何も言わなくていいだけのことです。またご丁寧にも「可哀想」とも言っていますが、**大きなお世話だ！**とだけ言っておきます。

「既存の労組の歴史的な使命は終わった」と言いますが、ならばどのような労働組合が目指されているのか、残念ながら具体的な姿は見えません。ただ組合費を使って品川のダイニングで大会を開催する組織を労働組合と言うのでしょうか。何故分裂して、わずか2年もたたないうちに過半数を割り込んだのか、自らを見直すべきでしょう。

そのために過半数代表選が2回開催されました。このことや社友会、労働者代表制に関してもいくつか主張されています。しかし「社友会を足掛かりに労働組合へ」という主張には開いた口が塞がりません。いったい誰が何のために社友会を組織しているのか、考えた方がいいのではないのでしょうか。

「選択」という雑誌を引用し、いまだに国鉄時代の労働組合を引き合いにしていますが、皆さんには新鉄労組分裂の際にあるOBが言っていた事を伝えておきます。「今回の分裂は元々国労だった役員の持つ工場体質の一番醜い所が表面に出たようなものだ。」国鉄時代の労働組合の価値観を引きずっているのは誰なのでしょう。

会社は新型コロナ第2波の対策と称して特休日の移動をはじめ、様々な施策を矢継ぎ早に打ち出してきています。私たちは職場で思い悩んでいる組合員に寄り添い施策に向き合っていきます。そしてチェック機能を十分に発揮し人間尊重の健全な会社を目指します。それは決して新鉄労組では出来ません。また未だに国鉄採用者が主体を担っている労働組合がどのような未来を描き、どのように実現を目指すのでしょうか？その意味で**本当に可哀想なのは新鉄労組に所属する組合員なのではないのでしょうか？**

以上